

◆◆エピソード◆◆

## 日常のボトムアップを防災に繋げる

田中 隆文

### 1 二つのボトムアップと公共受容モデル －立ち塞がる固い科学－

近年、ボトムアップの重要性が指摘され、ボトムアップを謳った企画の開催も多くなった。東日本大震災で、ツイッターやブログ、および草の根的な情報交換の威力が発揮されたことや、昨今のスマホの全世代への普及なども、ボトムアップ的な手法への認識を高めている。また、エネルギー政策についての意見聴取会が政府主催で開催されたり、各省庁もパブリックコメント（意見公募）を実施したり、文部科学省が“熟議”に取り組むなど、行政におけるボトムアップの活用の試みも増えてきた。災害対策においても、内閣府の地区防災計画制度のガイドブックにはボトムアップという言葉が繰り返し使われている。

しかし、意見を公募したり住民が企画に参加してさえいれば、ボトムアップの意義が発揮されることになるのだろうか。内閣府の地区防災計画制度を例とすれば、そのガイドブックには、地区から案をまとめる際、専門家のアドバイスを受けるよう繰り返し促されている。住民が案作りに参加しているので、ボトムアップという語が使われているのであろう。しかしその案作成の際に専門家からアドバイスされるノレッジは、“科学知”であり、ボトムアップ的に培われてきたローカルノレッジではない。東日本大震災以前、“科学知”は原発のメルトダウンの可能性をどのくらいと見積もり、明治の津波の教訓を語る石碑をどの程度重要視していたのかという教訓が活かされなければならない。防災計画策定におけるボトムアップで期待したいのはローカルノレッジの反映のはずではなかったのか。地区防災計画制度のガイドブックで求められている専門家のアドバイスは、ローカルノレッジを頭ごなしに却下する“固い科学”（藤垣，2008）であってはならず、地域特性（それは自然科学的なものだけでなく人文・社会的な意味での地域

特性も含む)の理解を踏まえた柔軟なものでなければならない。しかし、このニーズに応えるために必要となる“柔軟な科学知”をアドバイスできる防災専門家は非常に少ないのが実情である。

この事例で顕わになるのは、住民が参加するという意味のボトムアップと住民の“知”を反映させるというボトムアップとは別物であるということである。藤垣ら(2008)は、専門家が住民に一方通行的に“科学知”を提供する構図を「公共受容モデル(欠如モデル)」と表現し問題が多いことを指摘している。これに替わるべき「双方向モデル」では、住民から専門家へのローカルノレッジの提供が実現される。そして専門家は、受け取ったローカルノレッジを手掛かりに科学知の問題点を認識し対応しなければならないのである。

## 2 平時・災害時のボトムアップとローカルノレッジの活用 ーコンテクストの重視ー

防災計画策定におけるボトムアップではローカルノレッジの反映を期待したいと前述したが、このノレッジには地域で伝承されている遠い過去の災害の記憶であったり、自然・人文・社会科学にわたる様々な地域特性であったり、最近の大小様々な災害経験も含まれる。

一方、災害時に期待されるボトムアップによる情報とは、どこが崩れ、どの道は通行可能なのかとか、安否確認はどうなのかとか不足している必需品は何かなど、災害被害状況の実態を伝える役割も大きい。自動車会社のカーナビシステムで得られた通行情報など、情報収集はボトムアップで行われていても情報発信は当該地域の住民によるものではないものも含まれる。

さらに、今日ではインターネットで雨量や河川流量のデータが公開され、強雨域の短時間予想図が提供されているので、当該地域から遠く離れた地の居住者が、これらの情報を閲覧し危機感を抱いて、勝手に当該時域に対して災害の警告を発信することもありえよう。気象業務法で禁止されていても誰でも情報発信者になってしまうインターネット社会である。

このように平時と災害時ではボトムアップの情報の内容に違いがある。後者の通行情報についてはノレッジというよりも実績データというコンテンツととってもよいであろう。しかし、ここにローカルノレッジをコンテクストとして付け加

えて捉えていきたい。例えば、通行情報のコンテンツには、次のようなローカルノレッジが付加できる。どこの路面には日頃から降雨後に砂利が散らばってるいたとか、かつてどこが崩れたかとか、そういう伝承があるとか、道路が通行止めで孤立したあの地区は、日頃からまとまりがよいとか、そういう人文社会的なものや、感覚的なものも含めた広い意味でのローカルノレッジがコンテクストとして付加されることにより通行情報の価値は高まる。またこういうコンテクストが加えられることにより、「当該地域以外の人間が勝手に情報を判断し発信する」というデマと区別することも可能となる。

### 3 「コンテンツを並べる防災訓練」から 「関わりを実感し繋がりを生む防災訓練」へ

同様に防災訓練や防災減災啓発活動にもコンテクストを付加したい。内閣府の「地区防災計画制度」では、定期的な防災訓練の実施が励行されているが、参加者を毎回引きつけるのは難しく何年間も持続していけない。関心のある人は盛り上がっているが、関心のない人に対してはアピールする術がないと嘆く防災関係者は少なくない。

防災訓練の計画を作成する際、箇条書きの実施項目リストの大項目がトップダウン的に決定されたり、マニュアルに従って決定されてしまうと、細項目の内容は穴埋め問題の解法のようにコンテンツを埋めることになってしまい、想定外に無防備な防災訓練となりかねない。「コンテンツを並べる防災訓練」としてしまうのではなく、日常のイベントや行動と結び付けていく工夫が必要である。すなわち、“非日常現象の災害”に備える防災訓練に、“日常の生活”のコンテクストを重ねたい。

正月明けのどんど焼き（左義長）で振る舞われるお汁粉ぜんざいや、地域の歩け歩け大会のゴールで振舞われる雑炊鍋などは、災害時の炊き出しの練習という側面も持たせたい。役割分担・使用器具・安全管理などを災害時を想定して準備することにより、地域の行事が災害の備えに通じることになる。本来、地域の民俗的な行事や風習には災害に備えるという趣旨のものもあった。「綱つり」や「辻切り」などは災いを地域の境で防ぐものであったという（千葉県立房総のむら、1996）。「地域との関わりを実感し繋がりを生む防災訓練」を定着していくために

は、地区割りの線引き（地区の単位をどのように構成するか）を地域の伝統的な行事風習と整合するように見直していく必要もあろう。「地域との関わりを実感し繋がりを生む防災訓練」は、「顔のみえる防災」とも整合し、地域の共助の醸成にも繋がる。

#### 4 まず専門家が変わらなければ―拠点をつくりサロンを開こう―

現代社会において、自然災害に対応するために共助が期待され、地域の絆の重要性が指摘される。地域で培われてきた様々なローカルノレッジが“固い科学”の問題点を補うことも期待される。本書では地域のコンテクストを防災に反映させることを主張してきた。

しかし、現代日本では、市街地では区画整理が進み、中山間地でも道路や河川の付け替えや土地造成などもあり、伝統的な地域を実感できなくなっている。また行政も明治・昭和・平成の大合併を繰り返し、小学校の統廃合などもあって、先人たちの知恵を伝えるはずの地域の共同体は消えつつある。松沢（2013）によれば、地域の地縁による共同体社会を崩すため、明治政府は敢えて異なる地域割の行政界を導入し、それが現代社会の行政界の原点となっているという。また明治以降、特に高度経済成長期に人々が地域を離れ都会をめざしたのは、地縁社会の繋がりを重荷と受け止めていたことも否定できない。先人達が重荷と感じた部分をどのように現代的な手段で代替し補うことができるのかという研究も必要となろう。個々の地域に根ざした問題を解くためには地道な活動が重要となる。

前章では、「すべてを背負う知」によって新しく見えてきた災害像にコンテクストを付加して発信することを提案し、そのためには日頃から、郷土館などでワークショップなどのディスカッションが開催され、当該地域が情報交換の場を有することの必要性を訴えた。この情報交換の場（サロン）で、ぜひ地域の伝統的な行事風習も話題にしたい。直接、防災とは無関係のようでもコンテクストが重なり、それを辿るうちに、日常みている地域とは異なる様相がみえてくるかもしれない。

「すべてを背負う知」は簡単に短時間で育むことはできない。腰を据え、顔を突き合わせ、頭を寄せ合って、資料を見て、ディスカッションをして、現場を歩きまわって、培われる「知」である。そのためにはネット上ではない現実世界に

根をおろした拠点が必要であり、郷土館・文書館・資料館などの施設を活用したい。そこが成果の発表の場となり、さらに地域に「すべてを背負う知」の輪を広げることとなり、地域コミュニティを醸成することにつながる。

住民の地域保全への関心の高まりおよび団塊世代のOB化という現代の状況を踏まえれば、高い処理能力と豊富な経験をもった人々に、是非この輪に加わって頂きたい。

## 5 「すべて背負う知」の第一歩

平成23年12月、東京の平河町にある砂防図書館・同書庫と砂防古文書館に「砂防学における知の野生化研究会」のメンバーが、(ネットではなく実世界で)初めて集まり所蔵資料およびその保管方法を見学し、膨大な貴重な所蔵資料を目の当りにしたのち、同館の岡本正男館長にも参加頂いて、各自が抱く資料発掘への熱い思いを交換した。国立国会図書館などで進む電子化・ネット化、日常社会にまで広がる見える化やスマートフォンなどに象徴される現代という時代を踏まえ、今後の災害情報の流れや広報のあり方にも議論は及んだ。

情報社会といわれる現代においては、溢れる情報は追い風となるばかりではなくむしろ重要情報の埋没化に繋がることも指摘され、「様々な情報が溢れる現代社会において、個々の現場特性を埋もれさせることなくどのように整理し発信し活用していくか」が重要であることを確認した。「現場の多様な条件やコンテキストを削がずに残す」、「コンテキストを活かして検索で異種データを繋ぎ渡り歩く」、「機は熟し、ノウハウもある、インフラもある」、こういう研究会の3年間の活動から生まれたのが本書「想定外を生まない防災科学」である。

副題に「すべてを背負う『知の野生化』」を掲げているが特別なことをしようとするのではない。どれも従来から先人たちにより指摘されてきたことだったといえる。あえて言えば、従来、欠けていたのは切迫感だったのかもしれない。「こういう、すべてを背負おうとする方法もありますよ。」というオプションとしてではなく、「すべて背負う」しかないという、災害に対処していくための、いわば背水の陣としての決意が必要だったのである。

本書が、防災に関わるすべての人々に議論を呼び起こし、コンテキストを重視した防災・減災にむけて第一歩を踏み出すきっかけとなることを望む。

文献

千葉県立房総のむら（1996）平成7年度企画展示図録「災いくるな！Ⅱ．一境にこめた願いー」.

千葉県立房総のむら, pp.34.

藤垣裕子・廣野喜幸（2008）『科学コミュニケーション論』東大出版会, pp.284.

松沢裕作（2013）『町村合併から生まれた日本近代ー明治の経験ー』講談社選書メチエ, pp.159.